

(薩摩郡里村大字村西字中町馬場)

位置と環境

本遺跡は薩摩半島の西、約25kmの東シナ海上に浮かぶ甕島列島の上甕島に所在する。島の東部に位置し、二つの小河川に挟まれた海岸にほど近い微高地で、標高は3～4mの低地である。

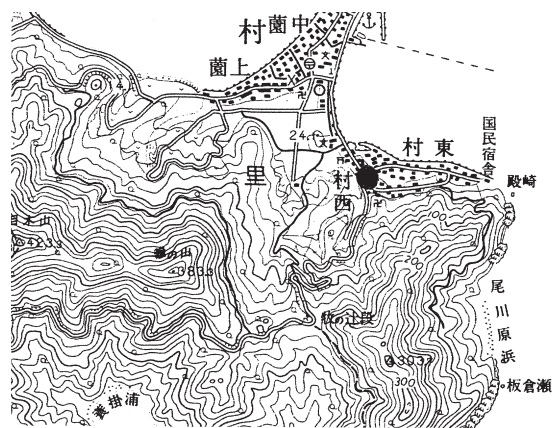
調査の経緯

昭和53年(1978)、工事に伴って土器・人骨・獣骨等が出土したことが遺跡発見の契機である。このときの遺物から同58年(1983)に弥生時代を中心とする遺跡が存在することが確認され、鹿児島大学関係者により現地で分布調査が実施された。翌59年(1984)に里村教育委員会の委嘱を受けて鹿児島大学法文学部考古学研究室により学術発掘が実施され(第1次調査)、60年(1985)と61年(1986)に同研究室単独で学術発掘が行われた(第2次・第3次調査)。いずれも手掘りによる小規模なトレンチ調査である。第1次調査では10㎡(第1地点)、第2次調査では22㎡(第2地点)と第1地点の拡張区2㎡、第3次調査では16㎡(第3地点)と第1地点の掘り残し部を発掘した。

遺跡は、各調査地点の設定された数10mの範囲を越えることは確実である。かつて京都大学によって調査された「里遺跡」と称される地点はそれらのごく近隣であると思われる、本遺跡と本来同一である可能性がある。

遺構と遺物

第1地点では、明確な遺構は検出されなかった。主体となる包含層は第3層と第4層である。第3層は弥生時代中期から古墳時代までの遺物を主体とする。古墳時代の流水等による二次堆積層の可能性が考えられている。弥生時代中期後半から後期初頭とみられる瀬戸内系の土器も出土している。第4層は遺物を最も多く含み、包含層としては最下層である。主体となる土器は弥生時代早期の刻目突帯文土器(第2図10～15)から前期(第3図16～27)の土器である。石錘・スクレイパーなどの石器類(第4図)も多く出土しているが、大半がこの時期のものである



第1図 中町馬場遺跡の位置

う。縄文時代晩期後半の黒川式土器(第2図1～9)も若干出土しており、縄文時代晩期後半から弥生時代前期までの土器型式が間断なく出土しているといえる。動物骨も多く出土しており、イノシシ・シカ・クジラ・鳥類・ウミガメ、その他魚骨が出土している。イノシシがシカより多いことは弥生時代遺跡の一般的傾向である。そのほか本層からは、縄文時代前期から後期の土器細片も少量出土している。

古代の須恵器や中世の中国産青磁の小片は第1層から現代遺物と混在して出土した。なお、南西諸島系とみられる土器も2点出土しており(第5図47・48)、第4層の時期のものと考えられる。そのほか本地点からは弥生時代後期の免田式土器(第5図45・46)や石庖丁片も出土している。

第2地点では、古墳時代から現代の遺構が多く検出された。主要なものとしては古墳時代の住居跡とみられる遺構が2軒検出された(1号住居跡・5号土壇)。調査区が狭いことと近現代の遺構により破壊されていることから、全容は明らかではないが、方形の竪穴住居跡とみられる。古墳時代前半期のものであると思われる(第6図)。

遺物は古墳時代を主体としているが、縄文時代以降、各時代のものが見られる。第2層は多量の貝を含んでおり、弥生時代から古墳時代の遺物が多く出土している。第3層は縄文時代晩期の層とみられ、晩期の土器や石錘などが出土している。

第3地点では、歴史時代から現代に至る土坑が複雑に切り合って検出された。遺物は古墳時代以降を中心とするが縄文時代のものも見られる。

土器のほか、石器としては両端打欠きの石錘や、大型円礫を剥いで刃部をわずかに加工しただけの特徴あるスクレイパーが多く、打製石鏃なども少量出土している。

特徴

縄文時代末から弥生時代前期にかけて間断なく遺物が認められ、南九州だけでなく九州南半の弥生時代成立過程を考えるうえでの重要遺跡といえる。弥生時代早期から前期の土器の大半は、北部九州の有明海沿岸部から薩摩半島に至る地域に共通した特徴をもつ。特に前期で主体となる甕は、口縁部の断面が三角形を呈するもので、早期の刻目突帯文土器の系統をひく（第3図16～20）。これは北部九州南部から薩摩半島を中心として分布する亀ノ甲タイプと呼ばれるものにあたる。一方、北部九州北半から西日本に広く分布する口縁部断面が孫の手状に外反する甕はごく少量見られるにすぎない（第3図21・22）。本遺跡の土器は黒雲母を多く含むという特徴があるが、後者はそれが見られないため、搬入品の可能性がある。なお、弥生時代成立期前後に南西諸島系の土器が出土する遺跡は九州では稀有である。

石器の多くは漁撈や狩猟に用いられたものとみられ、その種類や構成が出土した動物骨の種類とも対応している。弥生時代成立期の離島での生業を考え

る上で注目される。

弥生時代中期後半の山ノ口式土器がほとんど出土せず、かわりに熊本県地方を中心に分布する黒髪式土器が出土する（第5図35～39）。これは薩摩半島西半部とも共通する現象である。そのほか中期の北部九州系土器（第5図40）や、瀬戸内系土器などもみられ、前記の南西諸島系土器も含めて広域にわたる土器や製作者の移動がうかがえる。

古墳時代の土器には、薩摩半島北部と類似するものや甕島独自の地域色がみられるものが含まれる。

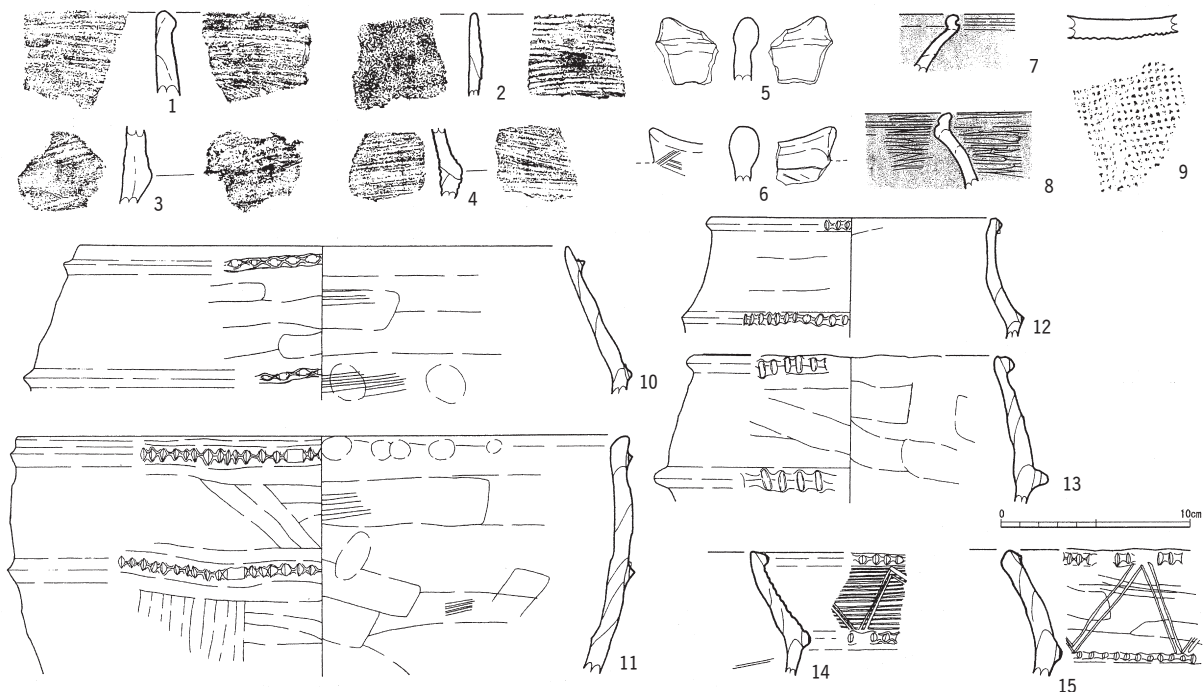
資料の所在

出土遺物は、里村教育委員会および鹿児島大学法文学部考古学研究室に保管されている。

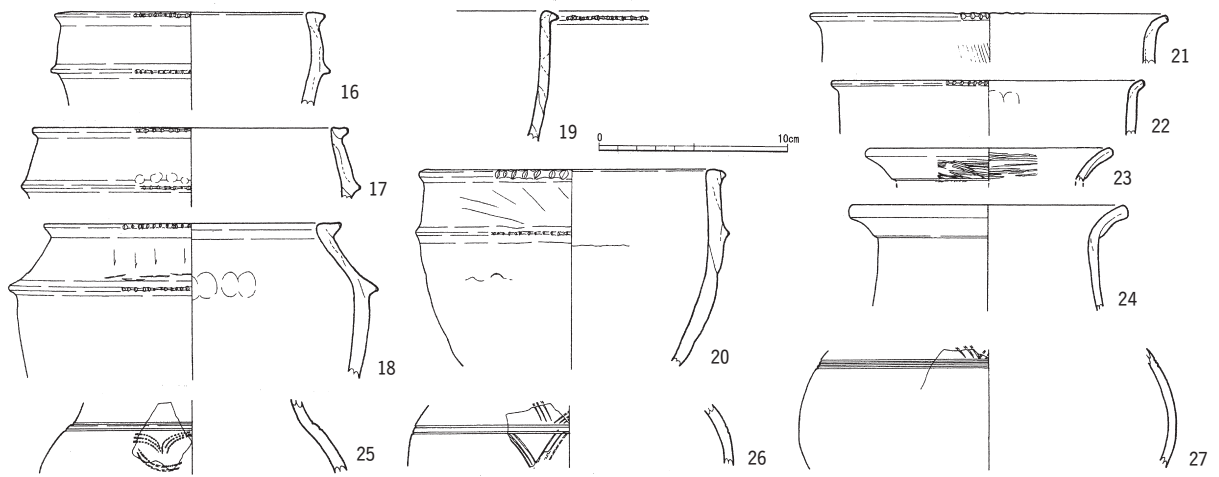
参考文献

- 里村教育委員会・鹿児島大学法文学部考古学研究室1985「中町馬場遺跡」『鹿児島県薩摩郡里村埋蔵文化財発掘調査報告書』1
- 鹿児島大学法文学部考古学研究室1987「中町馬場遺跡第2次・第3次調査概報」『鹿児島大学考古学会会報』第6号
- 藤岡謙二郎編1964「離島の人文地理」『鹿児島県甕島学術調査報告』

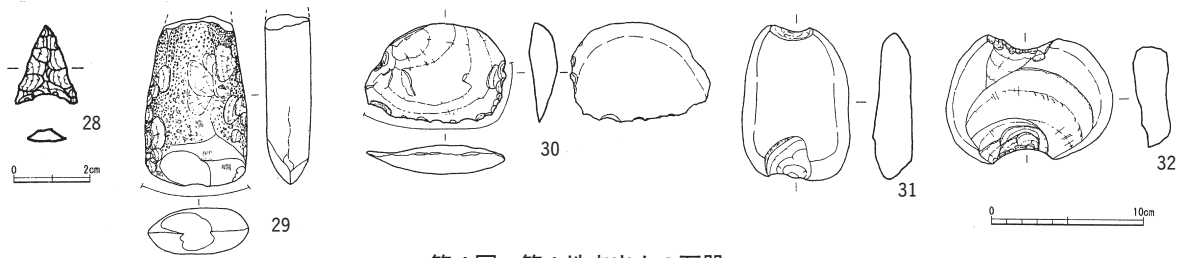
(中園 聡)



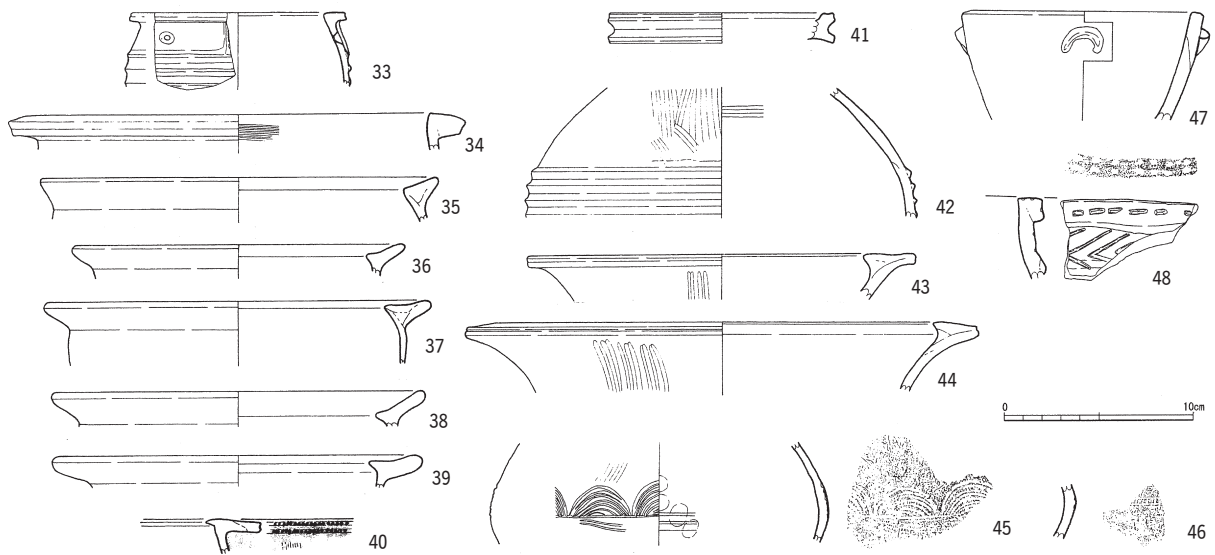
第2図 第1地点出土の縄文時代晩期土器と弥生時代早期土器



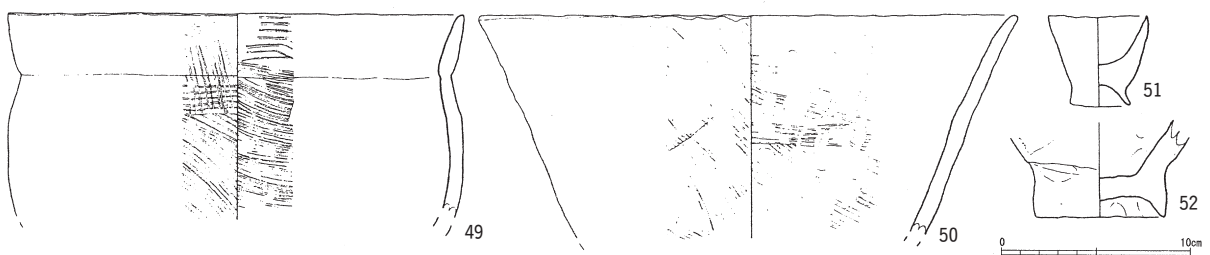
第3図 第1地点出土の弥生時代前期土器



第4図 第1地点出土の石器



第5図 第1地点出土のその他の土器



第6図 第2地点5号土壇出土土器